

中信ビジネス情報誌

人ノモノ

あひだ

2021 Vol.143
Business information magazine

特集 [伝統工芸を継ぐ]

株式会社 開化堂 文化の応接間

[経営者列伝]

独自技術の追求で
箔をつける、という価値創造。

株式会社ニッカテクノ
[この企業にこの技あり]

水質浄化の技術から始まる新事業。
おいしくて安全な魚づくりが
未来の食料危機を救う!?
株式会社ウイルステージ

[景気動向調査]



独自技術の追求で

“箔をつける”

という価値創造。

株式会社ニッカテクノ 代表取締役社長 中山 仁氏



来年、創業から95周年を迎える株式会社ニッカテクノ。同社で作られている金・銀・ホログラムの転写箔やフィルムは、雑誌の表紙やCDジャケット、商品パッケージなどに使用されている。まさに、あらゆる商品に箔をつけるこの技術力はどのようにして生まれたのか。3代目社長の中山仁さんに伺った。

箔の力にいち早く気づいた 初代社長の先見性

私の祖父にあたる中山義春が1927年、京都・一乗寺に設立した「中山研究所」が当社の始まりです。当時から金箔も扱ってはいたのですが、傷が目立ちやすい上に、箔と表面の隙間から酸化しやすいという課題があり、現在ほど普及してはいませんでした。そこで祖父が開発したのが「エナメル箔」というセルロイド製の樹脂膜。金箔の上から透明の膜を貼り付けることで、表面に傷がつくのも、酸化も防げるようになったんです。その後も転写箔の研究開発を続けていた当社にとって、大きな転機となったのが1962年。この年、業界に先駆けて「真空



▲「森永ゴールドチョコレート[®]」のパッケージと、金・ホログラム転写箔。(**現在は販売されておられません。)

蒸着機[※]」を導入、試作を始めました。しかし、前例のない試みがすぐに成功するはずはなく…。2年が経った64年、ついに日本で初めて「真空蒸着箔(メタリック箔)」の開発に成功。「森永ゴールドチョコレート」のパッケージに採用されるなど、蒸着箔が一気に普及していきました。そこから、タバコのパッケージや雑誌の表紙などにも使用されるようになり、需要が拡大したため、吉祥院に生産ラインを移し、量産体制に入っていたというわけです。

※ 真空中でアルミを蒸発させ、ベースフィルムに接着する機械。メタリック感のある箔を作ることができます。

ホログラフィー技術の開拓

私自身は、大学卒業後8年ほど医療機器メーカーで営業の仕事をしていました。医療に関わる仕事が多くなり、また次男でもありましたので、家業に戻ろうとは思っていませんでした。ところが、叔父・中山幸次郎と父・中山本一郎が共に2代目として箔の製造を続ける中で、限界が見えはじめていました。それは、箔を開発し続ける、という面での限界です。「新しい分野の開拓に力を貸してほしい」という父からの思いを感じていた私はちょうどその頃、新紙幣にホログラムが使用されると取り沙汰されていることを知りました。家業を継いで新しい事業を始めれば、自分次第で会社を大きくできる。そこに魅力を感じ、ホログラム箔の開発にチャレンジすることを決意しました。とはいえ、営業だった私は箔に関する知識も経験もゼロ。2000年にホログラム転写箔の事業を立ち上げてから、最初の10年はひたすら勉強でした。



▲あらゆるものに使用される、同社のホログラフィー技術。金属蒸着箔は車のフロントグリルにも。



▲箔を被転写物に接着する「接着層塗布」の工程。ベースとなるフィルムに黄色の染料を塗布しておくことで、ゴールドの質感に。



▲「真空蒸着機」。蒸発させたアルミを、約500Å(=0.05μm)の厚みでフィルムに密着させる。

当時、製造を始めたばかりのホログラム転写箔は生産性が低く、商品を出しても利益になりませんでした。でも、生産性を上げる方法は、商品を製造してみて初めてわかる。私もつきっきりで現場に入り、試行錯誤を重ねながら、当社独自の技術として発展させていきました。

3代目社長が取り組んだ変革

そうして現場に入りながら勉強する中で、改善点も見えてきました。私が入社した20年前は、時代の流れもあって、当社も、昔ながらの工場といった様子でした。つまり、お客さまに向き合おうという姿勢が不十分だと感じていたんです。だから、私は工場の体制そのものを変えていこうと考えました。そのためにも、当社の箔が何に使われているのか、実際の商品が分かる展示スペースを社内には設けました。最終的にどこで使われているのかが分かるようになったことで、仕事への姿勢・モチベーションが変わっていったと思います。

もう一つは、シヨブローテーション。会社の全体像を理解してもらった上で、技術を引き継いでいくため、各部署のメンバーを入れ替えていきました。生産効率を一時的に落とすとしても、若い世代への技術継承を進めたというわけです。

会社の内と外で、挑戦は続く

2006年には、揮発性有機化合物(VOC)の排出規制が開始され、環境保護



▲「ことあっぷ」では、オリジナルのペーパークラスターやティーソーダなどを販売。包装紙や袋にはもちろん、ホログラム箔が使用されている。

はますます重要な課題になっています。そんな中、当社は、大気汚染防止法が改正された2004年には脱臭装置を導入していました。また、コロナ禍においては、社員のマスク不足を解消するため、マスク生産設備も導入。感染予防を徹底し、社員・家族から一人の感染者も出さずことなく、今まで営業を続けています。

昨年6月には、清水にて「ことあっぷ」というアンテナショップをオープンしました。店内はホログラム箔やフィルムで装飾しており、商品パッケージにもホログラムを使用。当社のホログラム技術をより多くの方々に知っていただくための広告塔の役割も担っています。

来年の95周年、そして100周年に向け、偽造防止性能の高いセキュリティホログラムや、耐熱性、耐摩耗性などに優れた特殊箔の開発にも、今後さらに力を入れていきたいと思っています。また、海外では採用が進んでいる車の内装部品、外装部品(ex フロントグリルなど)への蒸着箔利用。これを国内でも進め、車業界を当社の新たな柱にしていきたいですね。業界の最前線に立つて牽引していく。それが私の目標であり、使命でもあると思っています。

株式会社ニッカテクノ

1927年の創業より、真空蒸着箔をはじめとするさまざまな転写箔、フィルムなどの製造・販売を手掛ける。日本国内で唯一、一貫作業でホログラム転写箔、ホログラムフィルムを製造しており、2008年には、世界有数のホログラム企業として「IHMA(国際ホログラム製造者協会)」に加盟している。



- 【本社工場】
京都市南区上鳥羽馬廻し5番地
- 【吉祥院工場】
京都市南区吉祥院這登西町41番地
- 【久御山工場】
京都府久世郡久御山町井新荒見86番地1
- 【久御山北工場】
京都府久世郡久御山町井新荒見85番地1
- 【研究開発室】
京都市南区上鳥羽馬廻し5番地
- 【ことあっぷ】
京都市東山区五条橋東6丁目510番地6

沿革

- 1927年 中山義春が一乗寺に「中山研究所」を設立。「エナメル箔」を開発
- 1958年 高号を「中山化学研究所」とし、真空蒸着箔の開発に着手
- 1962年 真空蒸着機を導入
- 1964年 日本で初めて真空蒸着箔の開発に成功。「森永ゴールドチョコレート」のパッケージに採用される
- 1965年 中山幸次郎、中山太一郎が吉祥院に工場を建築
- 1968年 「日本化学箔工業株式会社」を設立。上鳥羽に本社・工場を建設
- 1969年 中山幸次郎と中山太一郎が代表取締役就任
- 中山幸次郎、金属箔フィルムの製造方法に関し、府知事から表彰を受ける
- 1981年 久御山工場完成
- 1992年 「株式会社ニッカテクノ」に社名変更
- 2000年 「ホログラム転写箔」の製造・販売を開始
- 2003年 ホログラム機の設備増設
- 2005年 日本たばこ産業(株)「ピアニッシモ・ベシエ」に日本で初めてホログラム転写箔が採用される
- 2007年 ホログラフィー「2D」「3D」の一覧設備を導入
- 2008年 IHMA(国際ホログラム製造者協会)に加盟
- 2010年 JT「ピアニッシモ・ルーシア」に日本で初めてゴールドホログラムが採用される
- 2011年 ホログラム機の設備増設
- 2012年 本社工場 増設
- 2013年 欠点検査装置、スリッター機を導入
- 2015年 本社工場 更に増設
- 2016年 久御山北工場 増設・完成
- 2017年 中山仁が代表取締役社長に就任
- 2020年 欠点検査装置増設、マスク生産設備導入
- 清水にアンテナショップ「KOTOUPことあっぷ」をオープン